

『ソロモン航空戦は完敗だったのか？ 隠蔽された真実』

基礎知識篇その十九——空母編、後編の第十三部

すでに基礎知識篇その十七の冒頭で総括しましたように、ソロモンの航空戦は一九四四年の二月に、最後の一機のラバウル撤収を以て終了していますが、そこに至るまでの約一年間、ともかくも実質十分の一の戦力で戦い抜いたこと自体が戦史に残る奇跡でした。

日本軍は、四つの致命的な弱点を抱えていました。すなわち、

- ① 陸海平等に割当てられていた陸軍機が全く戦力に寄与することができず、しかもソロモン戦の最後まで適切な対応を怠ったこと、
- ② 陸海軍を問わず、飛行場の建設が軍属の大量投入による人海作業で、米軍が使用していた自走式大型建設機械が皆無だったこと、
- ③ 海軍航空隊と並んで日本海軍が優位に立っていた駆逐艦隊による魚雷攻撃が、肝心の駆逐艦を輸送業務と輸送船団の護衛に割かれ、その真価を発揮できないまま終わったこと、
- ④ 大本営がこれらの弱点を無視し、表現だけは勇ましいが実質内容の乏しい命令を前線の将兵に押しつけるだけだったこと——です。

一方の米軍は、この時期に至ってようやく陸海軍の歯車が噛み合ってきました。

- ① ソロモン戦の前半に苦戦し、大打撃を受けた海軍の機動部隊に代わって、強力な陸軍重爆撃機隊と戦闘機隊が投入され、主に日本軍の飛行場の破壊と輸送部隊の殲滅に威力を発揮し始めました。
- ② ハルゼーの艦隊は脇役に徹し、艦隊による敵陣への一斉砲撃などの、かつて日本海軍が創案してその効果を証明した作戦を随所に展開し、もともと火力に劣る日本軍上陸部隊を圧倒しました。
- ③ キングラの米海軍首脳部が最も重視したのが、海軍航空戦力の回復であり、中でも機動部隊空母と艦載機の増強、それに加えて必要人員の確保と計画的養成を大規模に押し進めました。
(米海軍の航空関係人員は、開戦時の約一万人が、終戦時には四十三万七千人と大幅急増。陸軍航空隊はさらに規模が大きく、人員増加は二万五千人から二百四十万人に達しています。)

日本では学徒動員で有名となった一九四三年十月はもうソロモン戦の終盤ですから、規模も時期も比較にならないのが分ります。

しかも米軍が新規採用者に十分な教育期間を与えていたのに対し日本軍は促成教育であり、未熟な航空隊員を直ちに最前線に投入していました。深刻な戦力不足に直面した前線からの強い要望に、中央の指導層までが冷静な判断力を失ってしまったのです。

現実の状況はすでに完全な危険領域に突入していましたが、大本

営は未だに抜本的な対応策に踏み込まず、ただ前線の将兵に対する厳しい督励と、航空機生産部門への割当ての強化だけでした。

東条首相に至っては、陸相、内相に加えて、一九四三年には軍需相、さらに翌年には参謀総長まで兼任し、独裁権力を強化しているが、これはむしろ事態を混乱させ深刻化させただけでした。

④ 航空戦力と並んで重点的強化対象となったのが駆逐艦と潜水艦でした。これまでは黒靴組（艦隊派または艦艇派、空母派は茶靴組）からの強い圧力もあり、開戦後も戦艦を造りつつあった海軍も、度重なる実戦経験によって、鈍重大型艦よりもこれらの小型艦の使用効率が低いのを実感し、急遽増産を進めたのです。

駆逐艦は開戦時214隻に対して戦時中建造が336隻。ほかに極度に装備を簡素化して早期建造を可能にした護衛駆逐艦が一九四三年以降相次いで完成し、戦争に間に合ったのが412隻。

合計して748隻の新規建造駆逐艦が太平洋での島嶼戦でどれほど効果的な戦力となったか、図り知れないものがありました。

なお、この間の日本海軍は、開戦時112隻、戦時中建造63隻に止まっています。それでもソロモン戦では全体としてほぼ米軍と対等に近い戦いを続けてきました。しかもリーダー技術で大きく出遅れていながら、陸軍部隊の輸送と護衛を担当し、さらに自身が輸送艦となり、立派に「東京急行」（――米軍側の呼称）の任務を果たしていました。

本稿では駆逐艦全体についての検証機会がありませんでしたが、ソロモン戦では重要な位置を占めていますので、敢えて強調しておきます。

南洋島嶼戦の実態解明を怠った戦後の戦史研究者たち

こうしてみると、最終的なソロモン戦の完敗は当然の帰結であることが明らかですが、注意しなければならぬのは、戦後の所論がここで解明した問題点にほとんど触れていないことです。

大本営での陸海軍の航空機生産枠の決定過程にまで注目した論者は森本忠夫氏だけのようですし、その氏にしても公式記録に準ずる戦史叢書記載の、陸軍は「ニューギニアを中心とする南方戦域の四三年一月から三月までの期間に三千機以上を喪失」という不自然な数字に困惑し、論評を避けているほどです。

いうまでもなく、これは全くの架空数字です。戦後に多数の航空隊関係者の手記が刊行されていますが、陸軍関係者によるニューギニア航空戦の手記は僅かなもので、しかもそれらは空中戦の回顧ではなく、飛行場で破壊された時の体験談が中心となっています。

ダンピール海峡の悲劇以降、ソロモンは海軍、ニューギニアは陸軍と、事実上の地域分担が行われていたのは事実です。ところが、ニューギニアの基地は早い段階で米豪航空隊の猛攻を受けて壊滅しており、もともと陸軍機が三千機も喪失するはずがないのです。

おそらくは陸軍の航空機生産数を決定するための基礎資料とされた数字と思われませんが、どうにも不可解な数字というしかなく、これに疑問を呈しない歴史研究者たちには不信感を覚えます。

僅かに残されている陸軍関係者の手記によれば、ニューギニアの陸軍航空隊は当初から実質的には無抵抗に近かったようです。

米豪の航空隊は間断なく日本軍飛行場を空襲し、それを避けて空中に上昇すれば米陸軍が投入したP38、P39、P40などが待ち構えていて、絶好の餌食とばかり襲ってきます。これでは陸軍の一式戦の「隼」では太刀打ちできません。ようやく四月にはこの年の初めに生産開始の三式戦「飛燕」が到着しましたが、この到着先はラバウル。どこまでも陸軍機は不運なのです。

先に述べましたように、六月には米陸軍が誇る最新鋭のサンダーボルトP47がニューギニア戦線に姿を現しましたが、この時期にはすでに日本陸軍機は壊滅していて、その二千馬力、時速676キロの重戦闘機と対戦する機会がなかったのは、むしろ幸運でした。

ニューギニアの陸軍航空隊が壊滅し、空からの支援を失い、海上輸送も絶たれた上陸部隊は、たちまち以前のガ島の兵士以上の窮地に陥りました。地獄絵図そのままの惨状は多くの記録に残されており、その作戦の当否を論う（あげつらう）のは容易です。

しかしここでは、未だに解明されていない新たな視点からの問題提起に挑戦することにしましょう。

それは戦力比較からは決定的に不利であり、せいぜい数カ月しか持ち堪えることができないはずのソロモン方面の日本海軍が、どうして一年近くも生き抜くことができたかという理由です。しかもその間、陸軍の十万人に近い大部隊の輸送と護衛を担当し、最後にはラバウルまで届け、終戦までの生き残りを可能にしているのです。

ハルゼーは水を得た魚のように生き生きしていました。彼は陸軍航空隊の全面支援を受けて、連日日本軍基地を猛爆し、駆逐艦部隊は輸送任務中の日本船団を魚雷攻撃。敵の戦力の衰えた頃を狙って海兵隊の精鋭部隊を上陸させます。次には、ガ島周辺の海空戦で彼を苦しめた憎むべき日本軍を一掃し、後は高度に機械化された建設

大隊に短期間で飛行場を建設させ、さらに虎視眈々と次の獲物を狙うのです。

一つ、また一つ、獲物である南洋の島が占領される度に、米本土の国民は喝采し興奮します。

おそらく彼は、自分が米海軍の巨大な作戦マシーンの中では、むしろ捨て石に近い役割を勤めているなど、夢にも思っていないかったことでしょう。海の英雄ハルゼーが最も高揚した時期でした。

しかしキング作戦部長らの米海軍首脳部の目は、この段階ですでに次の目標に向けられていたのです。

慎重だったスプルーアンスの第五艦隊

一方、機動部隊を指揮下に持つ第五艦隊は、ソロモンの激戦地帯を側に見ながら、大部分の戦闘に直接参加することはなく、専らこれまでに消耗した戦力の回復を最優先しました。

もちろんその根底には先のカサブランカ会談の決定があります。彼に課せられた最終目標は一九四四年半ばと予定された連合軍の総反攻時に、米海軍として最も顕著な成果を世界に示すことであり、それには日本本土を重爆撃機によって空襲できる場所を、海軍の力で確保することが最も効果的です。しかもそれは、一般国民にとっても目に見えて強い印象を与えるものであることが必要なのです。

それが歴史上誰も見たことのない巨大機動部隊を動員しての作戦であることは、海軍首脳陣の一致した判断です。何しろ今度の戦争は、日本海軍の山本五十六が創案した機動部隊による長距離奇襲攻撃から始まっています。米海軍の総反攻の手始めとして、これ以上適切な作戦は他に見出すことはできないのです。

スプルーアンスは、自分に与えられた役割を正確に理解していません。それがアメリカという国家、米国海軍という組織にとって、どれほど重要な意味を持つかを理解し、以後の彼の作戦行動は一貫しており、二度とぶれることはありませんでした。

ここで話題を一変します。

「奇貨、居くべし」という古代中国の格言があります。

これは正しくは古代中国戦国時代の強国趙に滞在していた呂不韋（ろふい）という大商人の言葉で、偶然にも同じ時期に弱国秦から人質として送られてきた秦王の孫と会った時に発した言葉です。

正しくは「此れ奇貨なり。居くべし」で、「掘り出し物」という意味があります。呂不韋はその孫が何か役に立ちそうな人物と直感し、全財産を投じて彼の庇護者となり、その孫が間もなく秦の始皇

帝となったことで彼もまた強大な権力を手中にしました。

(以上、「史記」「呂不韋列伝」による)

キング、ニミッツらの米海軍首脳にとって、陸軍のマ將軍とハルゼーが蜜月に近い状態となったのは、正に「此れ奇貨なり。居くべし」でした。

陸軍の航空部隊はもともと独立意識が強く、戦後間もなく陸軍から独立して空軍となるのですが、おそらくこの時期にその機運が生まれてきたものと考えられるのです。

その陸軍航空隊が前面に出てきた以上、第五艦隊はその本来の任務に集中することが可能となります。

その本来の任務とは、

- ① 事実上ゼロに近くなった空母陣の増強と、実戦訓練の促進。
 - ② 開発早々の新鋭艦載機F6Fヘルキャットの早急な実用化。
 - ③ 軽空母、護衛空母を艦隊空母として活用するための試行と訓練。
- 特に正規空母を中心とする高速機動部隊に比し、艦速と戦闘能力に劣る護衛空母艦隊を補強するための護衛駆逐艦隊強化などです。

これらはスプルーアンス個人ではなく、米国海軍の最高司令官であり、海軍作戦部長も兼ねたキング大將も、太平洋艦隊司令官のニミッツ大將も同意見の海軍の一致した総意だったのは間違いない事実と考えられます。

こうしてスプルーアンスの第五艦隊には当面の激戦地帯への参戦という任務が軽減され、これが日本海軍航空隊の負担を軽くする結果となったのもまた事実でした。

これは新任の古賀司令長官には唯一の「奇貨」であったのかもしれませんが。もちろん彼には知る機会さえ全くなかったのですが。

しかしながら、その軽減の度合いは僅かなもので、結局は多少の時間稼ぎに過ぎなかったことは、歴史が示す通りです。

米海軍が明確な戦略目標を確立し、その一方、緊急対応として陸軍航空隊の積極的支援を利用したのとは、対照的な対応でした。

戦後の論者が、この点をほとんど追求することのないのは、一体どういう事情によるものか、理解に苦しむところがあります。

このように、重大な日米海軍の戦略眼の差に気付かないまま(気付く余裕もないまま)、日本軍は陸海軍の戦力を結集した米軍の攻勢に対して、それでも必死の抵抗を試みました。

それが日本海軍航空隊のセ号作戦、通称ルンガ沖航空戦です。

六月末、ムンダの日本軍基地を重砲で攻撃するため、対岸のレン

ドバ島に米軍が奇襲上陸を成功させた少し前の六月十六日、海軍航空隊がガ島のルンガ沖の米軍補給船団に奇襲攻撃をかけました。

この詳細を例の松浪清一少尉の著書が記録しています。当時のわが航空隊と米軍航空隊の実戦状況を最も具体的に描写している記録と評価できますので、ここで抜粋して紹介することにしました。

ルンガ沖とは、前年の十一月三十日、例のルンガ沖夜戦が展開されて、田中頼三少将の駆逐艦隊が大殊勲を挙げた場所で、ガ島北部の飛行場地帯の沖の一角を指しています。

このさらに西方の海域が正に「鉄底海峡」であつて、米豪軍の艦艇と輸送船が多数停泊しており、今後の島嶼戦を有利に展開するためには、機会を見て泊地攻撃を加えることは当然の作戦でした。

六月十六日、日本軍はこの地域の航空戦力を総動員して攻撃部隊を編成しました。

総指揮官は582空の進藤三郎大尉で、零戦制空隊長を兼務。真珠湾攻撃時には嶋崎少佐の第二次隊の第一制空隊長を務めた歴戦の士。他に零戦隊は204空の宮野大尉隊、251空の大野中尉隊を併せて零戦の合計が70機。これが九九式艦爆24機を援護してブインの基地を午前十時に出撃しました。

当時ルンガ泊地には米軍の輸送船約20隻が停泊中で、レーダーで日本機の接近を感知した米軍は、直ちに迎撃態勢に入ります。

米軍戦闘機は、陸軍機のP38、海軍機のF4F、F4Uコルセアなど計104機。

壮絶な空中戦の結果について米側は次のように発表しました。

「日本機撃墜、爆撃機32、戦闘機45、計77。米機損失6」

米軍はこれを海軍省名でニュース発表し、著名な海軍評論家のモリソンまでがこの数字を彼の著書で使用しましたが、松浪少尉によりそれが全くの虚報であるのが判明しています。

事実は、米機撃墜34（うち不確実6）、撃沈は輸送船1、大型船炎上1。これは大本営発表もほぼ同じです。日本軍の損失は、松浪少尉の査定では艦爆13、零戦18の計31。搭乗員戦死28。

大本営発表による日本軍損失は20機と、かなり低く見えています。が、事実との乖離は米軍ほどではありません。

この当時の日本海軍が、きびしい状況ながら、まだ対等以上に戦っていたのは確かな事実でした。

——以下、次回に続く